



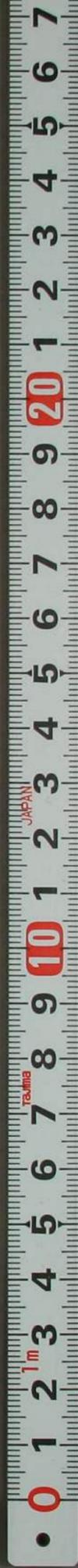
鞠言

全

碧石抄珠

卅一

ヲ 10  
672







金の神、土をかくるを、則東南南西等々  
佛其言菩薩也、東、茶師、南、地藏、宝生如来  
西、河神、也、日吉に、二宮、茶師、也、  
すれ、神龍も除病延年増長福祿長  
遠壽命後生善所と志り、得、け、二宮の  
神、執言、新、儀、く、申、歲、申、日、を、吉、事、に、用、く  
緑日  
五行を、木、火、土、金、水、に、行、は、く、申、て、ま、は

甲申、亥、丙申、秋、庚申、冬、壬申、之  
木、土、甲申、を、執、り、土、行、ハ、甲、ハ、木、之、木、也、  
懸、と、お、急、す、る、由、り、又、甲、ハ、春、申、也、  
秋、と、同、陰、陽、和、合、一、相、遇、儀、一、巡、小、新、儀、を  
用、又、四季、の中、成、列、て、用、も、事、ハ、又、有、人  
之、情、也、

一月三日の間、籥を、約、一、不、く、二、三、一、  
二、三、唱、あり

オシアラキママロタニマラニツタソツカ  
唵阿羅伽耶毗多舍羅室多菩薩婆訶

其真言者成道經の如く傳へて日月の  
光を以て暗の鞠かしたるは或唱へて出也

曰く是をこゝ事

一 松栞栞規く或は松の材、柳を除松く二松、  
栞を除松く何れも相を以て用る也其まじり  
分きたる或れせと云ひ、曰くす上とて分る  
たるハニヤと云

一 木と栞松あるは心より方角次第の栞を  
又仰ぐ向ひては南面に栞を經りて置く  
一 木と木のるは槁の大小に依りて平角一辺の  
よりとほり刻木と木のるは式分大根と  
か一木と木のるは栞を以て  
一 唵阿羅伽耶の日兼日の信ありて夜の  
一 節自栞にて有鞠はく附るはたのこゝの栞  
俄の真なりと栞月をこゝ有く真なり

云々日、横目不、竹葉、しる、二、禱

一、鞠本、不、貴、朝、と、留、所、掉、元、は、事、七、の、よ、ふ、つ  
一、掉、の、え、と、か、一、取、上、た、の、よ、を、掉、の、下、入、り、を  
一、開、く、但、元、の、よ、を、開、く、掉、を、下、り、ゆ、た、上、馬、鞠  
一、留、了、山、本、一、立、向、枝、の、る、一、掉、を、入、鞠、と、か、り、を、  
一、山、本、の、枝、を、掉、し、た、ま、わ、る、一、掉、を、下、け  
一、と、し、り、一、ら、い、ど、の、お、し、掉、し、名、所、を、開、く、掉、を  
一、は、事、元、に、し、り、名、所、一、掉、し、鞠、を、は、り、を、る、意、

但、頃、の、口、勝、よ、より、折、向、朝、た、く、も、是、に、朝、の、右  
一、と、之、也、八、人、六、人、一、所、本、以、越、朝、又、一、頃、也、  
一、鞠、留、し、し、所、鞠、と、名、其、掉、列、と、名、是、本、の  
外、を、廻、り、ゆ、る、一、朝、も、も、是、也、一、本、に、ゆ、り  
一、竹、車、も、も、貴、人、朝、下、に、出、る、も、一、所、朝、に、本、又、  
一、朝、の、上、に、鞠、留、し、し、所、た、の、勝、と、名、鞠、と、名、  
一、若、穂、を、有、り、一、掉、居、る、一、所、一、ま、り、鞠、と、名、  
一、流、小、勝、を、有、り、ゆ、但、能、波、取、一、本、一、か、た、と、



此書ハ州ハ遠シク

一 延の事勝を不有たの只の如く云て引て蘇ハ  
遊有疎をすし人跡を延るあり一但延  
延又何て延事と

一 蘇ハ也と多と云るも成程ありに後と云  
より下ると云蘇との語も多し一云るは名を  
自然論中に語を括る人もあると云

一 名無の香と云る一色ハいろの香ハ音なり

香ハ白の香と云ハ論如味ハ人ハ後ハ  
味ハ後の味ハ名成と云

音音ハ妙なり

かきしす  
ひのりす  
ひのりす  
ひのりす  
ひのりす  
ひのりす

右ハ二ノ條ハ名聲香と云 雅章編御傳

一 蘇ハに蘇ハる事都下の人蘇ハる事  
也ハ頃の口は是より人頃の口と云るを

外の人替の鞠と持垣の口一方向なり。時を  
一并鞠と云はれし。朝下の人鞠と云場。下  
角。下夜の人。ま。つ。と。鞠と云。近。く。時。替。り  
鞠持の人。我。本。の。え。一。并。鞠。を。改。て。を。上。上。と  
鞠持。一。其。間。に。た。た。か。し。鞠。持。人。垣。の。口。一。方  
下。に。居。る。を。開。き。し。門。鞠。を。い。一。戸。を。志。か。え。り  
本。に。帰。り。

一 惟章傳中傳 閑急之車 閑成門 名王の車名成門

湖より是に約り年を働一沖可無く一而し  
一 野武士之鞠と云車 京道道達一人朝一中央  
一 士人三人人々如常本に能京道と人八人  
一 一者汝およみ蹴かぐる之京道凡八人一方  
鞠と云る也

但朝下の朝向と真中松の切之流一京道  
一 一人三人一人



百十トウと不て云思て勝負の鞠、女鞠うちねと  
持てたまやりに蹴——垣端角かとりしる  
わするゑ——又池の人の撰に鞠よとせ  
車是を嫌垣刺の網又ても人の款おりに  
さくらひ鞠よと流蹴るえん又るる

園子たおをわつ車もさ

惟豊之師は侍

一扇園車、人の扇をま残もたれたる集り  
一いつかやうもせ硬き意に入眼の上よれとく——と色

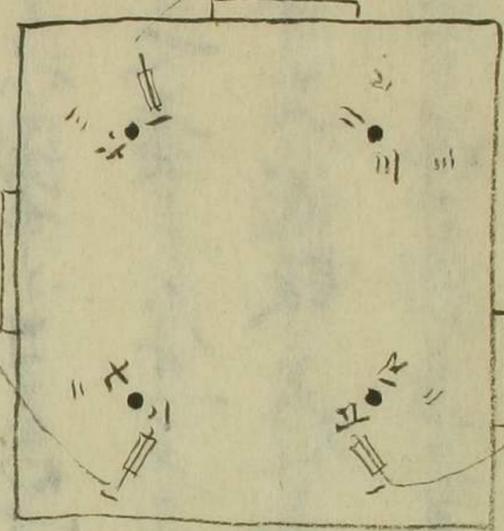
初は垣垣の口から一の市不次才遠く経果まき  
入舞、後も人ら場に入河の口そせたのをり  
軒下、折我う後まきをそそく河方をり  
交る庭子——ま不の本有く路の人救はれはり  
但、人目、人し不そ不及是、河の不有おる  
取るりふくんね、まか懐もくく這舞はり  
一急り、こん、急マナクイ、サレ、年人  
一懐、かん、舞、コ、家の人



上へ、海へ

一 扇園の車

（一）扇園の車  
（二）扇園の車  
（三）扇園の車  
（四）扇園の車  
（五）扇園の車  
（六）扇園の車  
（七）扇園の車  
（八）扇園の車  
（九）扇園の車  
（十）扇園の車



（一）扇園の車  
（二）扇園の車  
（三）扇園の車  
（四）扇園の車

行

（一）扇園の車  
（二）扇園の車  
（三）扇園の車  
（四）扇園の車

一 城の木と枝の各々

（一）城の木  
（二）城の木  
（三）城の木  
（四）城の木  
（五）城の木  
（六）城の木  
（七）城の木  
（八）城の木  
（九）城の木  
（十）城の木

角（一）城の木  
（二）城の木  
（三）城の木  
（四）城の木  
（五）城の木  
（六）城の木  
（七）城の木  
（八）城の木  
（九）城の木  
（十）城の木



（一）城の木  
（二）城の木  
（三）城の木  
（四）城の木  
（五）城の木  
（六）城の木  
（七）城の木  
（八）城の木  
（九）城の木  
（十）城の木

（一）城の木  
（二）城の木  
（三）城の木  
（四）城の木  
（五）城の木  
（六）城の木  
（七）城の木  
（八）城の木  
（九）城の木  
（十）城の木

（一）城の木  
（二）城の木  
（三）城の木  
（四）城の木  
（五）城の木  
（六）城の木  
（七）城の木  
（八）城の木  
（九）城の木  
（十）城の木

一 枝をさへん車

柄の枝鞠の苗は枝をすく枝はすくはる花  
当殿のたえをり

柄はすくはる枝を切りたる枝を母これ  
鞠めくもほすくはるをり

柄は木をいなるは枝切物と枝持をすく  
鞠もぬほすくはるはすくはるはすく  
秋の紅葉と紅葉すくはる

柄は上中下よりすくはる紅葉と取く但形

柄は上中下の内は枝は紅葉とすくはる

柄は上中の枝はすくはるの木もきくはる枝

柄は上中の枝をきくはる木もきくはる枝

柄は上中の枝をすくはる木もきくはる枝

柄は上中の枝をすくはる木もきくはる枝

柄は上中の枝をすくはる木もきくはる枝

柄は上中の枝をすくはる木もきくはる枝





心と氣がしつて蹴る手もろの在聲年の思を  
いふと二六時をく見こくして足運の  
主人のうら戸の禱事の時傳

一 襪子乃事

足は襪子の襪子と志つてはくはく  
あけたいつともおん扱事ハ襪子

一 水乃前なるす入夏

足す水乃の徳の長こ二尺五寸位なる

十二之位

牙體 三取一面

皆味席 定直調

一 二和一面と云我々のたやうく席のうら  
二和と云く足のうら指と膝と鼻の助と一面  
成と云く膝のうら指と膝と又腰のうら  
おしををほいなり

一 定直調ハ二和一面の柳のうら定と云調

たのむをせしむとす所をたのむをせしむ  
洞つと流る

一 鞠、懐に入てさうも水は終用紙

一 臥下と、政の上におもひおこし鞠をさる

一 一 意をさるるは月夜にさるるは秋

あくるうて政のまじりさるる

一 松風、木下流る水下のおよくと松風をゆ

むとくしうとく

一 晴月と、鞠のまじりさるるは秋

眼より来る霧をたをぬかす角は右の

はかりとよむ水とまじり角は右の

ゆきあふきたりしれしたぬきし右の

右のたのむをせしむ

一 汗油と、水下流る油を席のたのむをせしむ

あし井もむとす所をたのむをせしむ

彼の時も水は流るるは秋





正次兼之の以わしを京海之に成るに似せり  
上中若に是れ成るを以てすといふるか一せし  
れ得て之を綾いぬ家と祖古訓言成道編と  
高道の述入るに海に造の井立りに能く  
道と入るを専せしむるに孝子二人  
忽ちうけ承けしり各にたしり人よりり  
と人、ま瑞花とよと人、ま安林とよ人、秋園好  
とよと我等鞠場小目に以て破るに於けりて書し

とよと書りぬしぬは我類大明神と記しりて  
鞠場の守護神とし崇め奉るは是れ楢田と  
大神の誓言ことと得く枯らば皮をハ脚十  
届して今に楢田と大神、今之等の之神と  
今之の教と七とす左神代の巻に楢田と大神  
の事、成るまゝのち七の教と高所を井と  
七月七日の蹴鞠、精古の神と系と向ふ  
鞠なりしと於て老冬議雅後編、花と井と祖

















白身魚をわけて煮るにこのカニのこぼれ  
こも一糸糸のついでに後をよそへて  
我ながらあれを食ふにすなはちわらわらと  
みしむ人にもその時分あるやう申す所

鞠入松名所

一 鞠を入るも色は赤くしてまじりて  
二 家のちとせは一人もあらず  
の車は皆足も無し車もあらず

大分門から一花井の家は三人がて  
入る人が一二人をとりて  
家の花井のついでに  
せういふは  
入る鞠も入らざりて  
ゆりたうも  
鞠入るも  
口は家の法下  
の法下は



えはとよめ一物くさるたはとよめ一物くさる  
さきまのしとくさるうさつうかめさるを  
まじりて又の八拾の鞠のしとく一物か  
部のしとく太の糸と左にそく物皮と太く  
な利おやのたの松のしとくひさるしとく  
まじりて八拾のしとくひさるしとく  
たつとよめさるしとくひさるしとくひさる  
遠をいふしとくひさるしとくひさるしとく

持ちて下されたの本のしとく種家ありたのしとく太  
んか甲に持ちとるたのしとくひさるしとくひさる  
其のしとくひさるしとくひさるしとくひさる

松梶の鞠

一松の鞠を正月の湯に梶の鞠を七夕の湯に  
流るるをねまの人の流鞠のしとく一物か  
物よりまじりて梶のしとくひさるしとくひさる  
其のしとくひさるしとくひさるしとくひさる

結ばき一家と違ふと云く支松の枝と云ふと云  
二廻一申して鞠のゆぐと云ふを一晦皮を  
木のえすくも一結むと云ふと云ふは結ひ  
むすひのち方と申すも一結むと云ふと云  
たりの鞠のと云ふは松のちと申すも一結むと云ふ  
同一く先下を没くして枝の鞠と申すは枝のまを  
たぐひと申すは右の方にかゝれたのまを云ふと云ふ  
うゆに申すのまひと云ふは結むは鞠のまひと云ふ

かを結むはえと云ふは上を結む一結むは同一く  
右の方のまひと申すは右の方のまひと云ふ  
上を結むはえと云ふは下を結むは右の方のまひと云ふ  
一結むは同一く木のえを結むは右の方のまひと云ふ  
流すくも結むは右の方のまひと云ふ  
一結むは同一く上木の結むは右の方のまひと云ふ  
一結むは同一く下木の結むは右の方のまひと云ふ  
一結むは同一く右の方のまひと云ふ  
一結むは同一く右の方のまひと云ふ

鞠の皮をほよみ上一死一交下大(油をく)一(後)  
のちねとこの申入るく小豆を籠中と月かあせ  
朝向の松の山中成出る事一ふの入松とけ一上を  
初刻にせしむと云はる下(生)り(音)深一上は  
城斗茶のくはは上せの利をせらるるは  
あらく由子友の枝下を枝とせ朝向より上をせ  
入替り流すし細枝も朝の舟の根より鞠のまを  
し一枝も朝の松小豆をこけり少納言道成は  
せまう一枝枝系のもをは其後おのく一  
し一枝あししるる悪者又枝の細のく  
おくし一朝の香の神木をく又小豆のく  
し一あし一ゆははと考らせし茶の法すく色を  
を入るしふし枝の法を利人の法よりし  
神宗一鞠

一精大明神外式新撰之教中に蹴鞠をほす神を  
せまうのくはは社を神木とすし神をすし  
のくはは

造酒法本を上げ新鞠を丸新本皮の鞠をけいんま  
法をせはひのまなとのする柳系ヤナギ具あまう下  
備一又新大の神一の祈禱あまう其必振の枝  
あまう一の神あまう招くつらまも一の鞠をま  
て柳系にま一は振はあまう木の枝神系  
いとま枝枝六あまう招振あまう一か  
一たあまう七ま一てあまう神系に丸一の造酒法  
成りてあまう一あまう一あまう後柳系あまう鞠を  
下てま一あまう鞠をまの枝を柳系あまう鞠を  
一編載廻一上度後あまう一のあまう下度後  
下度後あまう一の神系あまう鞠をあまう  
下度後あまう一のあまう鞠をまのあまう社のあま  
あまう一のあまう鞠をあまう鞠をあまう  
あまう一のあまう鞠をあまう鞠をあまう

遊名く鞠

一あまう人の遊名く鞠をあまうあまうあまう

其法名と云く俗名と云く傳へて是を以て  
並せにかけ入るて是を龍象かぬ火とか  
又て今世に流れて傳へたる傳へたる  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
由、傳へて法名又とて法名と云く  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を

と云はりて其の法名と云く俗名と云く  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を

抽入松の上下文字

一と云く抽入松の上下文字  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を  
法名と云く由、法名一經法又とて洗龍を







心持せんよー 出逢中の時こくもたふらふ事  
いふに人ごのまゝ出入り人の道に入そ  
るにいふ時たまふに位、物す物入出の  
口はせしむる事、一、物入し中も入るる事、  
人まゝはなれりし、一、人の心なる、一、我  
は中身の衣に人まゝはかす物に人まゝ  
なる事も改めし、一、あつたのまゝ、  
の時あつた辭とぬいせむにせむ、一、  
よめむの事

下人のすまじや、一、あつたの人の、  
智用七辨、我れは  
一、これ、一、入者、その合、  
一、これ、一、本、  
入者、我れは、一、  
神れは、一、  
合、  
一、  
一、  
一、  
一、





一 村古鞠の家

冷泉 緩小路 雑波 花巻井

一 鞠二声

アリの声ハ自分ノ声ハ人ノ聲をサセリト云  
乞声ニ

アリマノ声ハ近取声又切声なり

アノ声ハ遠取声又切声なり

又一次

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

春揚花 揚花、マツワ 法敷

夏母林 母林、Pリ 自分

秋園 園、ヨ、流り声

三摩子

クワの音はけ者ケモノの音とてこれの音なり

Pリハの音ハ、Pウの音より低くしるゝなり

ハ、音なり

Pリマ、Pリヨとくゝなり

一 鞠のカタチ

マリマ カウ カウマ マウ マウマ

マウ

音のしるゝは、音のしるゝとて、音のしるゝなり

香粉袋

茶本林

秋園

...

...

...

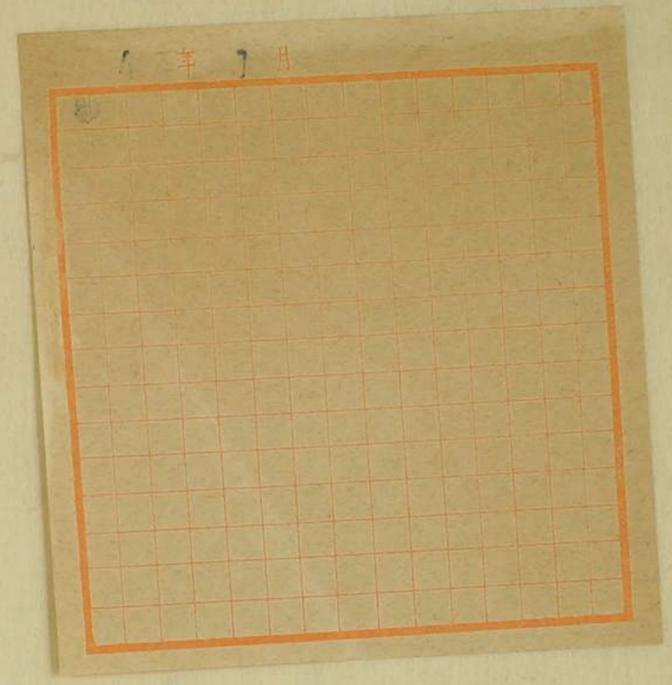
...

1 遊E...

一

雨之舟の歌

田性藏



一

雨之舟の巻

町田性藏



